山梨県韮崎市附近におけるチョウゲンボウの 蕃殖について

On the breeding colonies of the Japanese
Kestrel in Yamanashi Pref., Honshu

日 向 郁 夫

Ikuo Hyuga

I 緒 言

チョウゲンボウの蕃殖については下村兼史氏の長野県伊那郡九十九谷における発見と、同じく下高井郡十三屋における細野善熙氏等の発見と二つの記録がある。

筆者は昭和 30 年 4 月 26 日、韮崎市穂坂町日の城地内の断崖にこの鳥の集団蕃殖地を発見。更にその後の調査で附近の断崖にも少数の蕃殖を確認したので報告する。

II 発見の経路

昭和 27 年のバードウィークにおける探鳥会の際、チョウゲンボウと思われる鷹を寸見したので、その蕃殖地を発見すべく機会ある毎に調査し、またこの地方の人達からの聞込みを行つて来た。同年 9 月この地方に転任したので幸い、本格的に調査を始めたのであるが、何分にも蕃殖時期から外れており。加えて翌年 3 月に再び転任になつた。然るに、同 29 年 7 月、再びこの地方に転任し、本年始めて蕃殖期をこの地方で迎へる事になつた。偶々上記地内に絶好の断崖がある事を知り、早速 4 月 26 日同地を調査した所、意外に多数蕃殖している事を知つたのである。

III 環 境

韮崎市は昨年 10 月、韮崎町を中心とする 10 ケ村の合併により生れた。人口 33,000 人の小都市である。

この断崖は韮崎町を挟んで流れる釜無川と、その支流である塩川の両左岸に

あり、前者はハツ岳火山、後者は茅ヶ岳火山からの溶岩流と沖積層及び洪積層との接触点が河川により侵蝕されて出来たものである。このうち釜無川左岸を走る七里岩の如きは延々 10 km に及ぶ巨大なものである。

塩川左岸は遠く茅ヶ岳山麓に直接続き、耕地と森林とによつて形成され、その起伏のない緩い傾斜は遙か甲府迄延々と続き、その一部が塩川に侵蝕され断崖を作っている。

塩川右岸は左岸台地より低く、葦崎町、藤井町、中田町で、北巨摩郡下での最大の稲作地帯である。

釜無川左岸断崖は塩川右岸に続く台地を釜無川が侵蝕したものである。同右岸は神山町、清哲町、円野町、の農村を経て、南アルプス連峯に続き峻険な山岳をひ

かえている。

この地方は以上述べた様に、ハツ岳、茅ヶ岳の広大な山麓と、西に聳へる南アルプス連峯に囲まれており、その間を主流の釜無川が一気に甲府盆地に注いでいる雄大な地形を有している。即ち平地、高原、草地等の広い処を好む本種の棲息地としては恵まれた環境である。

IV 各蕃殖地の状況

イ「鷹の巣」断崖

最大の群棲地であるこの崖は葦崎市穂坂町日の城地内にあり、標高 382 m、崖の高さ最高 38 m、全長 350 m で南西に面している。崖は茅ヶ岳火山の溶岩流が大部分で僅かに礫まじりの風化土層が点在しており、至る所に侵蝕による

大小のキレットが形成されている。

昔この断崖を利用して砦とし外敵を防いだと云う話が残っているようで、日の城の名はこゝに由来するらしい。崖の直下は金峯山に発する塩川の清流がゴーゴーと水沫をあげている。崖の起点と終点には鷹の巣橋と駒井橋の二つの木橋が架設されており、藤井町と穂坂町とを夫々連絡している。人通りは頻繁で大型のトラックやオート三輪車等しばしば通っている。崖の上部はナラ・クヌギ・ヌルデ・アカマツ等を主とする雑木林で、直ちに麦畑、桑畑に続いている。

この崖に蕃殖するチョウゲンボウの数は略確認せるもの 17 巣である。巣の位置は不規則で、従つてその距離は一定ではない。巣と巣との距離は最も短いもので 6m である。彼等同志のテリトリーの争いは、巣の近くを飛ぶ時は一向に無関心だが、一旦近くの岩上に止ると直ちに攻撃する。

この崖に蕃殖している他の鳥類は、カラス・スズメ・セグロセキレイ・キセキレイ・ホオジロ・キジバト・ヤマセミ・カワセミ等で、他にシジユウカラ・オナガ・コチドリ・カワガラス・ドバト等しばしば目撃する。特にカラスは 3 ケの営巣ケ所を確認しているが、カラスに対する彼等の攻撃は、時々見られるが、それは猛烈なものではない。又ドバトは 20 数羽が何組かのグループに分れて常に岩上で遊んでいるが、これもカラスの場合と同様である。ただ一度岩上附近を飛ぶヤマセミに対して、相当強い攻撃を行つたのを目撃している。

次にほぼ確認せる営巣個所の配置の状態を記載する。

巣 番 号	1	2	3	4	5	6	7	8	9
崖の高さ m	21	22	26	31	26	24	24	28	32
巣の高さ m	17	15	18	25	21	18	10	22	25
距 離 m		14	43	23	22	27	8	6	18

巣 番 号	10	11	12	13	14	15	16	17
崖の高さ m	33	27	29	29	31	31	28	25
巣の高さ m	26	25	25	24	26	24	25	21
距 離 m	10	18	28	19	80	5	15	25

なお巣番号間の数字は巣穴間の距離を示す。

以上はほぼ確認した営巣ケ所であるが、営巣中の進行状態により、確認困難

の場合もあるから、見落としや誤認もあることと思われる。なお距離は目測である。

ロ 観音淵

前記「鷹の巣」断崖より、約 500 m 下流にあり、崖の長さ 150 m、崖の高さ最高 33 m で南西に面する。崖の状態は鷹の巣に似ている。この崖には 2 ケの営巣ヶ所を確認している。その距離は約 30 m で、一つは崖の最上部の突出部より 3 m 程下の凹所を利用しており、他は 7 m 下の岩石の穴を利用して

いる。

ハ 無名の崖

観音淵より更に 1,000 m 下流にあり、崖の長さ 150 m、高さ 29 m で南西に面する。この崖のすぐ近く中央線と信州往還が塩川を渡っている。汽車の窓から崖の状態がよく見られる。蕃殖数は 1 ケで溶岩流の小さなキレットに岩石が挟まつて出来た穴を利用している。崖の成因は「鷹の巣」断崖と同様である。ここより約 1,000 m で釜無川本流と合流している。

ニ 鷹 岩

上記無名の崖より 4,000 m 下流に位置し、中巨摩郡竜王村に属している。この崖は茅ヶ岳火山の泥流の殆んど終点で、釜無川支流の御勅使川が直角に突き当たり侵蝕してできたものである。崖の長さは 150 m、高さ 25 m で他の蕃殖地より遙かに小規模である。この崖の営巣数は発見が遅れた為不明確であるが、6 月 20 日の調査では、巣立後の 1 群と他に 1 巣が認められたので、2 巣ではないかと推定される。

ホ 七 里 岩

葦崎町を起点として、釜無川左岸に沿って溯ること 10 km、長坂町日の春で終る龐大な断崖の連続である。

釜無川左岸とこの七里岩の間は水田地帯をなし、この間を信州往還が走り、所々に部落が存在している。前記「鷹の巣」断崖との直距離は最短箇所で約 2,000 m 離れている。この崖は八ツ岳火山よりの溶岩流が釜無川により侵蝕されて出来たものである。崖の高さは約 29 m で南西に面している。崖の上は耕地で中央線が七里岩に沿って走っている。

この崖には葦崎町の起点より約 3kmの祖母石部落迄に 4 ケ所を確認している。この中 3 ケは風化土層中の大小の穴を利用しており、他は溶岩流の中で天然に出来た穴を利用している。

この七里岩の特徴は信州往還がすぐ近くを走っており、バス、トラック等交通は極めて頻繁で、しかもその沿道には人家が点在している。特に著しい例として、葦崎町の街の外れにある巣は、県道よりの直距離 35 m の近くにあり、崖の直下には人家がある。彼等の巣への往復は崖沿いに行われている様である。

この附近の古老達の話によると「若い頃より既に蕃殖が行われており、毎年夏になると幼鳥の飛翔しているのが見られるのに、一向に増えないのを不思議に思っている」と云っていた。

V 巣と卵

巣は断崖の中にある溶岩流の穴状の間隙、風化土層中の穴、又は絶壁上に自然に出来た凹所等である。風化土層中の穴は、その深さ、成因など詳びらかでない、又巣穴の大小は相当開きがあるが、古い巣穴程大きい様に思われる。

5 月 14 日観音淵にある 1 巣を崖の上部よりザイルを用いて降下し測定した結果によると、外径 32 cm の円形、深さ 6 cm の皿状で、巣材として経 4 mm 以下の細い枯枝と根を用いたものである。凹所が外側に傾いている為、材料は外側に多く用い内側は土の露出している所さえあつた。巣の中には小鳥の綿毛が巣材の一部の様に敷いてあつた、又小鳥の羽毛を主とするペリットが 4 ケ散乱していた。なおこの巣には孵化後一週間経過と思われる 5 羽の雛が白い綿毛に包まれてかたまっていた(口絵 8 図上を見よ)。雌は巣の上方約 3 m の所まで近づいて始めて飛び立つたが、その後の攻撃は相当物凄いものでキレットの蔭を利用してようやく観察する事が出来た。

以上の事実より推して、この鳥はやはり巣材を用いて営巣するのが元来の習性を利性であると思う。

VI 飛 翔

羽搏きの際の翼及び尾羽は非常に細く、翼角を突出して飛ぶ。帆翔は翼も尾羽も充分開いて行う。急角度の方向転換の時は尾羽を僅かに内転する。帆翔より急進に移る時は開いていた尾羽と翼を次第に細くし、翼角を充分突出して翼

を体に近い。翼が体に殆んどついた時はまるで弾丸の形で最も速度が出る。これは急降下で巣に入る時、及びカラスや他の鳥を上方より攻撃する時しばしば見られる。

帆翔は殆んど水平に停止して、翼と尾羽を動作させる場合と、翼を逆三角形にした様に上げる場合とあるが、気流の関係とも思えるし、又停止のまゝ下降する時の動作とも思える。風の強い時は翼角を突出し、尾羽を細めて完全に風に乗った形で停止する。この時の翼及び尾羽の微動は殆んど認められない。

筆者が昭和 26 年 7 月下旬、八ツ岳の硫黄岳で目撃したチョウゲンボウと思われる鷹の行つた帆翔は文字通りピタリと水平に停止して翼及び尾羽は微動だにしない実に巧妙なものであつた、八ツ岳の様な高山では上昇気流が激しいので翼の上下動を必要としない様にも考へられる。

なお攻撃の準備動作としての帆翔は一度も目撃していない。

VII 色 彩

雌は雄に比べて全体的に色彩が濁っている。即ち風切羽の黒褐色の部分と背面の栗色の部分との区別が、雌では明瞭ではなく、胸部の淡い赤褐色の部分も雌は黒味を帯びている。又尾羽の黒い帯も雌は非常に細いか、或いは全然認められない。然しこれは年令によつて異るとも思われる。

VIII 鳴き声

キッキッキットと鋭く鳴く場合とキーキーキーと哀れに鳴く場合と 2 種あるが、前者は主として警戒の時聞き、後者は雌が雄より給餌して貰う時等多く聞かれる。筆者は前者が雄の鳴き声で、後者が雌の鳴き声ではないかと想像している。

IX 雛の食性

6 月 6 日 巣立直前の 巣の下で採集した小鳥の羽毛、ペリット等について調査した結果、小鳥の羽毛はツバメ・セツカ・オオヨシキリの翼羽であり、ペリットはアオオササギの鞘翅、その他モグラの皮等である事が判明した。

又観察中トカゲ類の給餌が特に多く見られたが、孵化後より中期にかけてはトカゲ、昆虫類等の小型の食餌類を与え、後半にモグラ・小鳥・ネズミ等の小動物を与えるのではないかとと思われる。なお 5 月 5 日に中形の蛇を吊して岩上附近を飛んでいるのを 1 回目撃している。

X 観察要約

5 月 11 日早朝より夕方迄 1 巣につき観察した結果と、調査中観察出来た結果を要約する。

1. 採餌及び給餌は主として雄が行う。雌は孵化直後 (10 日前後) にあつては専ら抱雛を行い。その後は巣の入口か、近くの岩上に静止している。又抱雛は雌が食餌している間は雄がかわつて行う。

2. 確実に交尾と思われる動作をしばしば行つていたが、これは何れも育雛中行われたことであり、納得出来ない。この動作の最も顕著な例として。岩上より 2 羽一緒に地上の草叢に墜落して約 6 秒間地上にとどまつたのを目撃している。なお動作の時間は 8 秒前後でその間雌雄何れも鳴き続ける。

3. 巣立日数は 5 月 18 日現在孵化後 1 週間経過と思われた雛が 6 月 8 日に巣立っているので 28 日前後ではないかと推定される。

巣立後は 2 週間前後迄は巣の近くの岩上にとどまり、給餌をして貰っているが、その後は何れかへ飛び去る。6 月 23 日の調査では既に 1 巣の幼鳥と他に成鳥 3 乃至 4 羽を認めたのみである。昭和 26 年の夏に八ッ岳で確か 10 羽位のチオウゲンボウを目撃したので、この方面に移動するのではないかと思われる。

4. 採餌及び給餌が集団的に略一致した時間に行われる。これは非常に不思議な現象で納得出来ないことである。

XI むすび

以上でこの報告を終るが、ここの地方の人達からイワタカ・バカタカ・マグソタカ等と云う適切な方言で呼ばれているこの鳥は長年月にわたり恵まれた環境の中で年々蕃殖を続けているのである。しかも彼等は鷹類としては最も多産系であることは、将来の増殖を約束しているものである。幸い各所に歴大な断崖を有しているので彼等の収容力は未だ充分であるので、今後保護することにより益々増加するものと思われる。ここに発表するに当つて人々の関心が高まり、彼等の生活を脅かす事があつてはならないことを筆者は何よりも心配するものである。

本調査発表に当り、種々御指導御助言を頂いた清棲幸保氏、宇田川竜男氏に深い感謝の意を表わす次第である。

なお調査は今後も続行し、更に不明な点を究明したいと思つている。

(1955 年 6 月 30 日)

参 考 文 献

- 中西 悟 堂 十三峠の長元坊を訪う「科学の実験」Vol. 5, No. 9.
細 野 善 熙 十三峠の長元坊「野鳥」Vol. 15, No. 6. 「野鳥」Vol. 17, No. 3.
榎 本 桂 樹 野の鳥の思い出
内田清之助 日本鳥類図説
清 棲 幸 保 日本鳥類大図鑑

Résumé

In April, 1955, the author found the breeding colonies of the Japanese Kestrel, *Falco tinnunculus*, near Nirazaki City, Yamanashi. The colonies were found along the extensive valley cliffs of the River Kamanashi and its tributary, Shio-kawa, which flow through the volcanic lava of Mts. Kayagatake and Yatsugatake to penetrate the Nirazaki City into Kofu Plain.

Five separate colonies were found at: 1) Takanosu cliff 38 m high and 350 m long; 17 nests, 2) Kannonbuchi cliff (about 500 m from 1) 33 m high and 150 m long; two groups of nests, 3) Unnamed cliff (1000 m from 2) 29 m high and 150 m long; 2 nests, 5) Shichiriiwa cliff (near Nirazaki) 29 m high, 4 colonies along a 3 km cliff. Notes are given of its nests (natural hollows of lava, etc. at least 6 meters apart from each other), flight, voice, food (with some evidence of group feeding), relation to other birds and breeding behavior.

チヨウグンボウの繁殖する俗に「鷹の巣」とよばれる断崖の全景である。全長 350m、崖の高さは最も高い所で 38m ある。場所は山梨県韮崎市穂坂町にあり、塩川に面して立っている (本文 17-24 頁を見よ)

The entire view of the "Takanosu" cliff, a breeding place of the Japanese Kestrels. It is 350m in length and 38m deep at highest part, facing River Shiokawa, Hosaka-village, Nirazaki, Yamanashi Pref., Honshu (See p. 17).

チヨウゲンボウの産座とまだ小さい雛 5 羽で、山梨県韮崎市附近にて 1955 年 5 月 14 日向郁夫氏の撮影したもの (本文 17 頁参照)

A nest of the Japanese Kestrel containing 5 chicks. Near Nirazaki, Yamanashi Pref., May 14, 1955. (Photo by Y. Hyuga) (See p. 17).

チヨウゲンボウの巣にいる巣立近い雛 3 羽で、山梨県韮崎市附近で 1955 年 6 月 7 日 清棲幸保氏の撮影したもの。

Three fledged chicks of the Japanese Kestrel at nest. Near Nirazaki, June 7, 1955. (Photo by Y. Kiyosu).